

近世牛窓における神功皇后の安産信仰と桂女

花谷 美紅

はじめに

五香宮は牛窓神社の摂社であり、寛文七（一六五七）年に藩主・池田光政によって、京都御香宮より神功皇后と応神天皇が勧請された（注1）。五香宮には神功皇后のものと伝わる遺物が存在し、遺物のひとつである腹帯は安産の御守として授与されていた。

一方、勧請された御香宮のある京都において、神功皇后と安産利益を語っていたのは桂女であり、神功皇后の侍女の末裔であるという由緒を持ちながら、民衆に向けて守札を売り渡っていた。小阪奈都子氏は「十八世紀中葉頃、桂女の生業として『瘡除け・安産』が認知されたと言えるのではないか」としている（注2）。

本稿では神功皇后の安産信仰に着目し、牛窓と京都において、民衆へ神功皇后の安産信仰がどのように浸透したかについて

考察する。また、桂女の活動が、牛窓五香宮の語る神功皇后信仰と五香宮の活動に類似していたかについても確認する。

一 神功皇后の安産神話

牛窓五香宮における安産信仰の考察に入る前に、神功皇后の安産神話について確認する。以下は『日本書紀』（注3）の一部である。

時に、適皇后の開胎に当れり。皇后、則ち石を取りて腰に挿み、祈りて曰く、「事竟へて還らむ日に、玆土に産れたまへ」とのたまふ。其の石、今し伊都県（注4）の道辺に在り。〈中略〉十二月の戊戌の朔にして辛亥に、菅田天皇を筑紫に生みたまふ。故、時人、其の産処を号けて宇瀨と曰ふ。

次に、『古事記』（注4）の記述を挙げる。

故其の政いまだ竟へぬ間に、其の懐妊みませるが、産れま

すに臨む。御腹を鎮めたまはむと為て石を取りて、御裳の腰に纏かして、竺紫国に渡りたまひ、其の御子はあれ坐しぬ。故其の御子の生れましし地に号けて、宇美と謂ふ。また其の御裳に纏かしし石は、筑紫国の伊斗村に在り。

『日本書紀』・『古事記』ともに、神功皇后が三韓征討へ向かう前に、出産を遅らせるための行動を起こしていることが描かれている。帰国後に神功皇后が無事に皇子（応神天皇）を産んだことも書かれ、出産を遅らせるために用いた石は、鎮懐石伝説として『万葉集』にも登場する（注⁵）。

時代が下るにつれて『日本書紀』・『古事記』に描かれた英雄的な神功皇后像（注⁶）はそのままに、鎌倉期には『八幡愚童訓』甲本（注⁷）に以下のような記述がみられる。

此后ト申ハ第十五代ノ帝王神功皇后、後ニハ神明ト顕テ聖母大菩薩ト申キ。〈中略〉去程ニ、皇后ハ御産ノ氣出来リ、御腹類ニ悩マシク思食ケレバ、対馬国ニテ御船ヨリ下給ヒ、鎧ヲ解置キ白石ニ御腹ヲ冷シツ、御裳ノ腰ニ石ヲ插マセ給テ、「奉^ニ我孕^ニ」御子、日本ノ主ト成リ給ベキナラバ、今一月胎内ヲ出サセ不^レ可^レ給」、誘ヘ申サセ給シカバ、御腹ノ内ヨリ、「十月ニナレバ立チ直リタル計也。軍静マラシマデハ生ルマジ。〔トク〕異国ニ向ハセ給ヘ」ト申サセ

給フ。御音ヲ聞食テハ、合戦ノ事モ忘ハテ、「去ラバ早此皇子ノ生レ給ヘカシ。今一目モ早ク見奉ラン」トゾ思食ス。余ノ床シサニ猶御音ヲ聞マホシク思シ食シ、「何ゾ仰アルゾ」ト、度々是ヲ問給。〈中略〉皇后御婦朝ノ後、十日ト申シハ、仲哀天皇九年ノ十二月十四日也。此日、筑前国宇美宮ニテ御産平安、皇子誕生シ給テ、第十六代ノ帝応神天皇神明と顕レ給テ、掛毛畏八幡大菩薩ト祝ハレ給者也。〈中略〉皇后ノ御裳ノ腰ニ挟セ給シ白石ハ、大分宮ノ御躰トス。御産ノ時、槐ノ枝ヲ倒ニ立テ執付給ヒタリシガ、麤而生着テ今ニ在リ。〈中略〉宇美宮ノ槐トテ、国母仙院ヲ始メ進テ、御産平安ノ御祈ノ仏ノ御衣木ニハ此槐ヲ以被^レ用。

『八幡愚童訓』には、三韓征討へ向かう神功皇后という英雄性に加え、聖母としての認識が付加されており、胎内の御子（応神天皇）に語りかける母としての姿が描かれるようになる。『日本書紀』・『古事記』には見られない描写であり、神功皇后の母としての側面に関心が寄せられるものであったことがうかがえる。

以上の資料から、神功皇后と安産とは深い関わりがあることがわかる。

二 牛窓五香宮の造営と安産信仰

牛窓五香宮は、牛窓神社（八幡宮）の摂社として寛文七（一六五七）年に造営された。以下より引用する「五香宮記録」^{〔注8〕}には、造営の経緯が詳しく記されている。

一、当社五香宮者、往古住吉之宮居なり。当昔神功皇后、三韓^江渡らせ給ふ時、住吉の御下^タに御船^ヲ繫、住吉の神前^江上らせたまひ、御誓ありしとかや、三韓御征討御凱旋の御時、住吉の神殿に御鎧・御太刀・御腹帯・御馬具等^ヲ籠させたまひしより、由緒有りて当所^ヲ牛転と号^ク。略して牛窓と云。其外数多申伝是有といへとも、縁起・御甲等、豊前国宇佐八幡宮に納^{レル}よし伝承仕候。其後住吉之宮居段々及大破^ニ、御神宝^ヲ同村八幡宮^江奉移有之候所、寛文六年午七月 古少将様 住吉 八幡宮^江御成被為遊、御宮の来歴御尋被為、則於御前^ニ御両社乃儀^ヲ具尔申上候。同年九月朔日、登城被為仰付八幡宮^江新知石式拾石御寄付御折紙頂戴仕候。并寛文七年未十月^ニ住吉宮御再興被為仰付、御神宝住吉^江戻籠置候様、御趣意^{ニテ}被為仰付、夫より此宮居^ヲ五香宮と御改被為遊候。

以上

牛窓村祠宮

井上左衛門

五香宮の前身である住吉宮に、神功皇后が立ち寄ったこと、三韓征討の帰路に再度立ち寄り、「御鎧・御太刀・御腹帯・御馬具等」を奉納したことが書かれる。その後、住吉宮を再興し、五香宮と名前を改めさせたのは古少将（池田光政）であった。あわせて、「御神宝住吉^江戻籠置候様」と、八幡宮へ納めてあった神功皇后の遺物を住吉宮（五香宮）へ戻したこと、神功皇后の遺物が五香宮に存在することが書かれるのである。

寛文七（一六五七）年に勧請された五香宮は、その後、光政の周辺の藩閥係者によって信仰されていることが次の資料よりうかがえる。

元文四年未九月廿日 酒折宮拝殿ニ大机ヲ立、其上ニ御神宝得り、栄光院様入御上覧ニ申候。相済申候而、御腹帯ノ切レ頂戴被成度ト、佐々重左衛門殿より御申指上可然との御仰ニ付、安産の御守等一所ニ指上申候。（後略）

元文四（一七三九）年九月、酒折宮（岡山神社）において、栄光院（池田綱政側室・継政母）が御神宝を上覧したと記録される。上覧の後、「御腹帯ノ切レ頂戴なされたき」という申し出があり、「安産の御守等」とともに授与したことも記録され、元文年間には神功皇后の腹帯を安産の御守として授与していた

ことが確認できるのである。

神功皇后の腹帯を御守として授与していた記録はほかにもあり、栄光院の上覧から十年後の寛延二（一七四九）年には、池田宗政とその正室にも安産の祈禱を執り行い、腹帯の切れを授与している。記録を以下に引用する。

寛延貳年巳十一月五日

若殿様 御前様 御懷胎御安産御祈禱執行仕候而、翌六日杵村平馬殿江相渡、御同人様より御奉行所江御指出。

神功皇后	御安産 御守	井上丹後	御腹寸法
内包	御腹帯ノ切入ル	前二同シ	

以上により、池田光政による御香宮勸請以降、支配層にあたる池田家の安産信仰が存在していたことが明らかとなった。池田家を中心とした支配層は、五香宮の神宝の上覧、安産の祈禱を行っており、支配層には神功皇后の遺物の存在と安産利益が浸透していたと考察できるのである。

三 京都御香宮と桂女

牛窓五香宮は京都御香宮を勸請したものであることは先にも触れたが、本節では近世における御香宮はどのような存在であったのかを確認していく。次に引用する論考は久世奈欧氏のもので、御香宮が近世の政治的変動にどう対処したのかを、桂女の活動とともに論じているものである（注9）。

神功皇后の由緒・利益は、御香宮にとつては幕府との関係を考える上でのみ重要なものであつて、一般民衆や氏子に関わる限り問題にされなかつた。加えて縁起が整つてからの御香宮と幕府の関係は安定しており、ことさら神功皇后由緒を語る機会もなかつた。まして安産疱瘡守という利益は、語る必要はなかつた。そのためあえて神功皇后伝承を独占する必要はなく、桂女と由緒をめぐり競合を起こすことはなかつたと考えられる。〈中略〉この桂女との相論（慶応四年に御香宮が桂女の守札配布・勸化を差し止めるよう新政府に要求し、それが許可される―花谷注）は、御香宮が維新时期を生き抜くために、新たに朝廷に庇護を求める道を開こうとして起こしたものだつたのである。〈中略〉御香宮は、幕府の庇護を受け、中世以来の領主関係や氏子関

係の中で生きる近世的な神社から、桂女や占出山・両船鉾が担っていた個人消費者の要求―民衆の安産・疱瘡除祈願に應える近代的な神社へと変貌を遂げる。その課程で、近代国家が公の場から排斥した民間宗教的なもの―桂女の役割と、神功皇后の安産利益が、神社に吸収されているのである。

久世氏の論によると、近世の御香宮において、神功皇后の由緒や利益は主に幕府に向けて語られるものであった。幕府との関係が重要視されており、『御香宮縁起』^(注10)内には、神功皇后が「十五代の聖主神功皇后」とされ、「三韓征伐の明王、四夷退伏の神将の宝廟、衆願満足の処抱なり」との認識を得ている。

近世の御香宮が語る由緒は神功皇后の三韓征討や、豊臣秀吉・徳川家康とのかわりの中で出来上がったものであり、鎮護国家・武運長久といった利益を含んでいた。そのため、幕府に向けて安産や疱瘡除けの利益を語る必要はなかったのである。

一方、神功皇后の安産・疱瘡除けの利益を語っていたのは、桂女であった。桂女とは、京都を中心に活動していた女性であり、中世頃には姿を現していた。近世になると、神功皇后の臣下の末裔であるという由緒書が見られるようになり、「安産・

疱瘡除け」を語って守札を売り渡っていた。小阪奈都子氏、村上紀夫氏は近世桂女の由緒書と活動について考察しており^(注11)、村上氏は近世の桂女の活動は公儀に向けたものであったが、発信の対象が「公儀から民衆へ変わってきている」こと、その変化が一八世紀中期頃にみられるようになったことをあわせて指摘している^(注12)。

その後、御香宮は桂女の活動を吸収し、安産や疱瘡除けの利益を語り始めるのであるが、一八世紀中期頃の桂女の活動について、由緒書を確認したい。以下は享保一七（一七三二）年の桂女の由緒書である^(注13)。

城州紀伊郡上鳥羽村、桂姫と申、家筋之儀者、乍恐其往昔神功皇后宮、臣家末流二而、家筋相続仕、往古より上鳥羽村二住居、乍恐當御賢代迄、御吉例御祝奉申上、御礼相勤候儀者東照宮様、参河 御在国之御砌、私家神功皇后、三翰御退治、目出度 御還陣被為成候御吉例と御上意之上、被 召出、参河迄供奉被 仰付、於彼地 御懇意之御儀共にて、拝領物等仕、殊更御国之紅花迄頂戴仕、難有冥加之仕合奉存候。（中略）神功皇后御帽子、奉称 神秘具
右御帽子と奉申者、桂姫家筋奉伝 神秘二而、則其昔を不奉存候。東照宮様江被 召出候節茂、桂姫奉著、其後大坂

御出陣 お亀様附添 御陣中御供之節も、先祖奉頂著。

其後御代々、右御帽子持参仕、乍恐 御目見江之節、于今

姫著仕候佳例ニ御座候事右御帽子之儀者 御代々持参仕、

姫奉著、御祝儀申上候。以後上々様、御頂戴被為成、殊

若君様 姫君様 御幼雅之御方様、御願円満御祈念、御頂

戴被為成、則御疱瘡茂御輕ク被遊候様申候。依之種々号奉

納と、桂姫江被下候事（中略）右之通御座候。以上

上鳥羽村かつら姫

同夫 中澤與兵衛

享保十七壬子年十月日

前半は桂女の先祖と家康との関係が記されており、後半には

「神秘具」として、神功皇后の帽子が挙げられる。その帽子を

頂戴すれば「則御疱瘡茂御輕ク被遊」るのであり、疱瘡に対し

て利益があるとしている。次に、この由緒書きから約二十年後

（一七五一年）のものを以下に挙げる（注14）。

寛延四年未ノ二月、桂女江戸表出府由緒之事

一、神功皇后之家臣之筋之由ニ而、山城国上鳥羽村桂里、

當時御代官、小堀十左衛門支配所ニ罷在候

中澤勘十郎七代

中澤右門
かつら女

神功皇后、三韓退治之節、御甲之代、被為 召候御綿帽子、

代々所持仕置申候

権現様三河ニ御座之節、参上仕、右之御吉例を以、御綿帽

子被成御頂戴、其上ニ而、右之桂女工紅白之襷、被下置之。

八幡於龜之御方御供仕、御陣中エも度々罷出候之由、（中略）

平川口より大奥エ上り、末廣

御紋付御扇子差上之、紅裏之時服一重、黄金五枚拜領之。

御直勤之女中百五十人エ、紅白粉、爲土產相送之。右御綿

帽子頂戴之、又者男女小児、頂戴仕候者、疱瘡輕ク有之由

ニ御座候。

かつら女

寛延四辛未年二月

中澤右門

先に挙げた享保一七（一七三二）年の由緒書と、傍線部について比較すると、神功皇后が三韓征討の際に被っていた帽子という点については変化はないが、神秘具である帽子を戴いた際の効能として、「女は、出産輕ク」といった点が追加されていることがわかる。桂女の活動は、時節に応じて変化していったのである。しかし、どちらの由緒書も幕府との関係を記したものであった。民衆に対して、桂女はどう認知されており、どのような活動を行っていたのかを、次の資料より確認する（注15）。

桂姫

右桂姫儀安産疱瘡守、洛中洛外信仰之ものへ相對を以弘メ申度由相願候ニ付、願之通被仰付候、疑敷筋ニ而ハ無之、尤望無之もの者押而請候筋ニ而ハ無之候間、此趣寄、無急度向、江可申聞置事

申十二月

右之通被仰渡候間、信仰之面、ハ請可被申候、以上

町代某

右は宝曆二（一七五二）年の京都の町触である。桂女が「桂姫」と表記されており、「安産疱瘡守」を民衆に広めることが書かれている。由緒書において自身と結び付けていた安産・疱瘡除けの利益が、宝曆（一七五一―一七六四）年間には民衆にも認知されていたのである。主に幕府に向けて語られ、活動を行っていた神功皇后と安産・疱瘡除けの利益は、桂女の積極的な勧化により民衆にも浸透していったと考えられる。

四 牛窓五香宮の民衆へ向けた目線

前節において近世京都における神功皇后と安産利益について確認したが、牛窓においては民衆にどう享受されていたかにつ

いて考察する。次に引用する資料は「五香宮記録」のものである^{〔注16〕}。

奉願上

一、邑久郡牛窓村御香宮、御神宝之箱、并土蔵建立仕度願上。依之御野郡濱野村内宮於社地ニ、諸人ニ拝見入、其散物ヲ以建立可仕存念ニテ入拝見申候処、殊外不繁昌。剩雜用等毛不足仕、迷惑至極仕候。数多願望神社末代之儀乍、此上御國中町在とも、相對勧化仕度奉存願上候通被仰付被下候ハ、難有奉存候。左候ハ、私儀廻申度奉存候、此旨宜被仰上可被下候。則建立仕度略縁図相添指上申候。尤御郡方へ毛御内意奉窺上候已上。

井上丹後

元文四年未十一月

記録によると、元文四（一七三九）年に民衆に向けた神宝の開帳が行われている。神宝を納める土蔵を建立するための資金集めとして行われたものであったが、「殊外不繁昌」として終わっている。開帳に際して版行された「五香宮略縁起」を以下に引用する^{〔注17〕}。

五香宮略縁起

備前国邑久郡牛窓村に鎮座す五香宮は、神功皇后を祝ひ奉

る所なり。皇后は人王十五代にして、仲哀天皇の御后、応神天皇の御母なり。応神天皇は国々祝奉る八幡宮是なり。神功皇后神の御託ありて、三韓を征給ふ。皇后すなはち将帥となり給ふ。その時八幡宮を御身にはらませたまへば、御帰陣まで事ゆへなく御胎内にやどらせ給へと御誓ありて御腹帯をゆはせ給ひ、御鎧をめさせ、御太刀をはかせ給ひ、男子の御姿とならせ給ひて、異国にわたらせ給へば、国王自服し、刃に血ぬらずして勝利を得たまふ。筑紫の国に帰り給ひて、八幡宮生まれさせ給ふ。その所を宇弥といへるとなん。其凱旋の御時、当国牛窓を過させ給ふ。一ツの牛鬼海底より出、潮を蹴立、焰を吹掛け、御船をなやます。其時住吉明神出現ましゝて、其牛の角を捕へ、転し投倒し給ふ。故に旧名を牛転といふ。今牛窓といふは、よみなまれるなり。後に牛鬼の骸三ツの嶋と成る。むくろ嶋といふ今略して黒嶋といふ。又、腹凝て蛆と成る。今の百尋是也。其牛首を葬りし所を墓山といふ。其外塵輪の嶋等数くあり。皇后御よろこびのあまり、宝器を住吉の神殿に籠させ給ふとかや。その、ち今の五香宮へ遷し奉る。そのかみ此御鎧をめされし時は、八幡宮をはらませ給へば、御引合の明しゆへ、武内宿祢みづから鎧の草摺をとりて御

引合を襲奉る。是脇盾の初とかや。然れば是を拝しながら願望を祈るに不叶といふ事なし。男子は武運長久、女子は難産をまぬかる。(後略)

「五香宮略縁起」には、神功皇后の三韓征討神話が書かれるとともに、牛窓の地名伝承も書かれる。神功皇后が住吉明神によって牛鬼が倒されたことを喜び、牛窓五香宮の前身であった住吉宮に宝器を納めた。その宝器に「男子は武運長久、女子は難産をまぬかる」利益があるという。神功皇后の安産利益はアピールされていたものの、開帳が「殊外不繁昌」であったことを踏まえると、民衆には一般的ではなかったであろう(注18)。

しかし、開帳の行われた元文四(一七三九)年時点で、五香宮が民衆へ神宝の存在と武運長久・安産の利益を広めようとしていることが確認できるのである。

同時期の京都御香宮においては、利益を語るのには主に幕府に向けてのもので、鎮護国家・武運長久の利益が強調されていた。民衆に向けて利益を語っていたのは桂女であり、前節で確認したように、宝暦(一七五一―一七六四)年間には民衆に桂女の存在と利益が広まっていたことが確認できた。

牛窓五香宮が元文四(一七三九)年に民衆へ向けた神宝の開帳を行い、民衆の勧化に乗り出したが、同時期の京都において

は御香宮・桂女ともに幕府に対しての活動が主であった。その後、桂女が民衆に対しての勸化を始めている。

牛窓五香宮が民衆へ神功皇后の安産信仰を広めようとした動きは、支配層から民衆へ目を向けた桂女と類似したものであったと考えられる。そして、牛窓五香宮の行った神宝の開帳は、桂女の民衆に対する勸化が積極的になる以前のものであり、牛窓五香宮の活動は独自性を持ったものであったと考えられるのである。

おわりに

牛窓五香宮は寛文七（一六五七）年に藩主池田光政が京都御香宮を勧請したものであり、神功皇后の遺物が神宝として残る。支配層には神宝の上覧、御守の授与を通し安産信仰が浸透していたが、民衆に向けた神宝の開帳は「不繁昌」に終わっており、民衆には神功皇后の安産利益が一般的ではなかった。

対して京都御香宮では、主に幕府に向け神功皇后の武運長久・鎮護国家の利益を語っていた。民衆へと神功皇后の安産利益を浸透させたのは桂女であり、後に御香宮は桂女の活動を自社へと取り込んでいる。

牛窓五香宮の活動は京都御香宮とは目線が異なり、資金調達のためではあるが、京都御香宮よりも早い段階で民衆に向けて神功皇后の安産利益を語っている。桂女と牛窓五香宮の直接的影響関係は現状では見出せていないが、同時期に民衆に向け類似した活動を行っていたのである。

京都では桂女が、牛窓では五香宮が、それぞれ民衆へ神功皇后の安産信仰を広めようとしていた。牛窓五香宮が民衆に対して勸化を行っていたという点は、牛窓五香宮の積極性を表すものであり、牛窓における神功皇后信仰の独自性といえるのである。

なお、桂女が牛窓へ来訪し勸化を行っていたのか、何らかの形で桂女の活動について認知していたのかについて、また、牛窓地域における安産についての民間信仰との関係については、今後の課題としたい^{（注19）}。

注1 以下、本稿において「五香宮」と表記する場合は牛窓五香宮を、「御香宮」と表記する場合は京都御香宮を指す。

2 小阪奈都子「近世における桂女の実像とその由緒」『女性史学』十四号（女性史総合研究会、二〇〇四年）

3 小島憲之ほか校注・訳、新編日本古典文学全集『日本書

紀①（小学館、一九九四年）「巻第九 氣長足姫尊 神功皇后」

4 中村啓信訳注『新版 古事記』（KADOKAWA、二〇〇九年）

5 『万葉集』における鎮懷石伝説は、以下のようにある。

かけまくは あやに恐し 足日姫 神の尊 韓国を 向け平らげて 御心を 鎮めたまふと い取らして 斎ひたまひし ま玉なす 二つの石を世の人に 示したまひて 万代に 言い継ぐがねと 海の底 沖つ深江の 海上の 子負の原に 御手づから 置かしたまひて 神ながら 神さびいます 奇し御魂 今の現に 尊きろかむ

（巻五・八一三）

天地の 共に久しく 言い継げと この奇し御魂 敷かしけらしも

（巻五・八一四）

右の事伝へ言ふは、那珂郡伊知郷箕島の人建部牛麻呂これなり。

（小島憲之ほか校注・訳、新編日本古典文学全集『萬葉集②』（小学館、一九九五年）による。）

6 『日本書紀』・『古事記』に描かれる神功皇后の英雄的性格については、曾倉岑「神功皇后」『講座日本の神話 古

代の英雄』（有精堂、一九七六年）に詳しい。

7 鎌倉中・後期に成立した石清水八幡宮の寺社縁起。引用は桜井徳太郎ほか校注『日本思想大系 寺社縁起』（岩波書店、一九七五年）による。

8 『牛窓神社文書』による。『牛窓神社文書』は、牛窓神社宮司岡崎義弘氏より拝借中の複製版による。詳細な成立年は記載がないが、記録は貞享三（一六八六）年から始まる。なお、第二節における引用資料は全てこれによる。また、適宜句読点を付した箇所がある。

9 久世奈欧「近世く近代初頭における神功皇后伝承——山城国伏見御香宮神社・桂女を中心に」『史林』九八巻五号（史学研究会、二〇一五年九月）

10 神道大系編纂会編『神道大系 神社編四』（神道大系編纂会、一九九二年）。なお、旧字体を改めた箇所がある。

明神の昔を申奉れば、十五代の聖主神功皇后にておはします。神亀元年に筑前国香椎宮に移り、其後一百三十拾余年を経て、当所に迹を垂給ふ。此明神と申は、三韓征伐の明王、四夷退伏の神将の宝廟、衆願満足の処拠なり。威風を八極になひかし、慈航を四海にわたす事、ひとへに此当神の御恩澤也。

11 小阪奈都子「近世における桂女の実像とその由緒」『女性史学』一四号（女性史総合研究会、二〇〇四年）、村上紀夫「近世の「桂女」と由緒書」『説話文学研究』四四号（説話文学会、二〇〇九年七月）等がある。

12 村上紀夫「近世の「桂女」と由緒書」『説話文学研究』四四号（説話文学会、二〇〇九年七月）には、以下の指摘がある。

幕府の下賜金や御救銀に依存していた「桂女」は、一八世紀に安産や疱瘡除けの札を配り、広く金銭を集める勸化に乗り出した。〈中略〉さらに「出産軽ク、又者男兒女小兒、頂戴仕候得者、疱瘡軽ク有之由二御座候」との利益が書かれるようになる。さらに「有之由二御座候」という伝聞から、「武運長久、安産のため殊に疱瘡除けの助共ならんか、是を受よ」という積極的な発信に転換されていることに注目したい。ここから、「是を受よ」と呼びかけられた読み手として想定されたのは、既に公儀から民衆へ変わってきていると考えられる。

13 名取穰之介『桂女資料』（大岡山書店、一九三八年）
14 右に同じ。

15 京都町触研究会編『京都町触集成 第三卷 自延享元年至宝暦七年』（岩波書店、一九八四年）

16 『牛窓神社文書』『五香宮記録』

17 『牛窓神社文書』『五香宮記録』より。「五香宮略縁起」の翻刻は倉地克直『近世日本人は朝鮮をどう見ていたか―「鎖国」のなかの「異人」たち―』（角川書店、二〇〇一年）による。

18 倉地克直氏、注17前掲書参照。

19 村上紀夫「近世における桂女と配札・勸化」『芸能史研究』一七〇号（芸能史研究会、二〇〇五年七月）には、江戸下向に加え、明和七（一七七〇）年に江戸で勸化触が出されているほか、甲斐・武蔵などの東国でも桂女勸化が行われていることが指摘される。また、京都・大坂を中心とした畿内近国での勸化も進められていた。

付記 「五香宮記録」をはじめとした様々な資料をお見せいただき、多大な御協力・御教示を賜りました牛窓神社宮司の岡崎義弘氏に、この場を借りて感謝申し上げます。

また、本稿の内容は、二〇二二年六月一三日に本学で行われたノートルダム清心女子大学日本語日本文学会での

発表に基づきます。発表に際し御教示を賜りました皆様
に、感謝申し上げます。

（はなたに みく／本学大学院博士前期課程）

キーワードⅡ牛窓五香宮、神功皇后、安産信仰